

# 2023 年度 創造的な教育実践

## 1. ゼミの武蔵の実践

### 1-1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部助教 笠原 一絵

この授業は、2008 年度に正規授業となり、今年度で 16 年目を迎えました。

2023 年度は、課題や体制などを以下のように大幅に変更しました。

まず、課題は「CSR 報告書の作成」から「協力企業を取り巻く社会課題への提案」に変更し、協力企業は「1 セメスター2 社」から「1 セメスター1 社」とし、2 チームがそれぞれ同じ企業を研究しました。(本プロジェクトでは、1 セメスターを 2 つの期間に分け、中間発表までの前半をフェーズ 1、最終報告会までの後半をフェーズ 2 としています。フェーズ 1 は学部系統ごとのチーム、フェーズ 2 では学部横断のチーム構成になっています。)

そして、教員は経済学部、人文学部、社会学部から各 1 名の 3 名体制から 2 名体制となり、2023 年度は経済学部と社会学部から各 1 名が担当しました。そのため、フェーズ 1 では経済学部と国際教養学部 EM 専攻のチームを経済学部教員が、社会学部、人文学部と国際教養学部 GS 専攻のチームを社会学部教員が担当することにしました。

春学期、秋学期ともに 1 クラスを開講し、定員を 30 名から 20 名へと変更しました。春学期、秋学期の学部・学科別の履修者数は表 1 のとおりとなっています。内訳は、春学期は、経済学部が 6 名、人文学部が 5 名、社会学部が 8 名、そして国際教養学部が 1 名の合計 20 名、秋学期は経済学部が 8 名、人文学部が 3 名、社会学部が 5 名、そして国際教養学部 2 名の合計 18 名です。男女比を見ると、春学期は男性 5 名、女性 15 名(男性比率 25%)、秋学期は男性 7 名、女性 11 名(男性比率 38.9%)と、春学期、秋学期ともに女性の履修者が男性を上回る結果でした。なお、今年度は国際教養学部 GS 専攻の学生がはじめて履修しました。

春学期のフェーズ 1 では、2 チームがそれぞれ人文学部、社会学部、国際教養学部の合同で「人文社会系チーム」を構成し、各々の学部には与えられたフェーズ 1 の課題を分析した上で中間発表を行いました。

一方、秋学期のフェーズ 1 では、2 チームの人文学部と国際教養学部を合同で 1 チームに、同様に 2 チームの社会学部も合同で 1 チームの構成としました。春学期の経験から、人文学部・国際教養学部 GS 専攻と、社会学部が別のチームで課題の分析と発表を実施できたことは、フェーズ 1 のプロセスにおいて教育効果が高まりました。これは、今年度から体制が変更したこと、「1 セメスター1 社」に変更したことにより、学部ごとの履修人数に偏りが生じても対応できた点です。また、定員が 20 名になりフェーズ 1 から全てのチームが 1 つの教室で活動できたことで、履修生と教員の双方にとってフェーズ 2 への移行がスムーズになりました。

さらに、課題を「協力企業を取り巻く社会課題への提案」に変更したことで、学生にとって身近な視点からの提案を検討することが可能となり、以前より課題に対して「自分ごと」として取り組めるようになったようです。

表1 2023年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生(学科・学年・学科・性別)

学科	セメスター		春学期				秋学期					
			2年次生		3年次生		学科 合計	1年次生		2年次生		3年次生
	男	女	男	女	男	女		男	女	男	女	
経 済	1	0	0	0	1	0	0	2	3	0	0	5
経 営	2	1	0	0	3	1	0	0	0	0	0	1
金 融	1	1	0	0	2	0	0	0	1	0	1	2
英語英米文化	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1
ヨーロッパ文化	0	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0
日本・東アジア文化	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	1	2
社 会	0	1	0	5	6	0	1	0	1	0	0	2
メディア社会	0	0	0	2	2	0	0	1	0	1	1	3
国際教養学科EM	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国際教養学科GS	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	2
性別合計	4	5	1	10		2	1	4	7	1	3	
セメスター別学年割合	45.0%		55.0%			16.7%		61.1%		22.2%		
履修生合計人数	20					18						

今年度も春学期、秋学期ともに全面的に対面での授業(課外活動を含む)が実施できました。しかしながら、高校時代のほとんどをコロナ禍で過ごした学校生活(部活動や学校行事への参加、友人との関係構築などが制限されたこと等)の影響は非常に大きく、以下のようないくつかの状況が見受けられました。

- ・対人コミュニケーション能力が全体的に低下している
  - ・経験が少ないため理解力が乏しい(資料を読み込む力、教員や他者の話を理解する力、等)
  - ・視野が狭く想像力が働かない
  - ・失敗を恐れているようで能動的に活動できない
  - ・価値観が偏っているため、教員や周囲からのアドバイスにも自分の考えを曲げようとしない学生がいる
- 等です。

さらに、チーム活動で困難な状況に直面すると、自身を正当化しようとする場面もありました。また、特にフェーズ1では、専門分野での基礎学力がかなり不足しているため、教員から調査や思考のフレームワークを丁寧に提示しないと調査分析できない等、論理的思考力がコロナ禍以前より低下しているように感じました。

このような状況下で、教員としては、個別面談を増やして学生をフォローしていく工夫をし、教員間の体制づくり等が更に重要になると感じました。

一方、昨年度から Teams の活用を開始したことで、学生間で編集作業を共有してできるようになり、格段に作業効率が高まりました。報告書はこれまで Publisher で作成していましたが、Power Point で共同編集しても以前と遜色ないクオリティになっています。その反面、授業用 SNS への投稿や活用が少なくなり、今後は授業用 SNS の意義を改めて学生に伝えるとともに、授業用 SNS と Teams を組み合わせた使用方法を再検討していきます。

この授業は2つの柱から成り立っており、一つが、「協力企業を取り巻く社会課題への提案」、もう一つが「社会人基礎力の育成と自己評価能力を高めること」です。表2は、後者の社会人基礎力に関する

データになります。春学期と秋学期を合わせた期間(通年)における履修生全員の平均値を見ると、受講前(事前評価)と受講後(事後評価)の間で最も伸びた能力は発信力でした(1.6ポイントのプラス)。これは、瞬時に情報を共有できる SNS 世代である学生たちが、今までとは異なる思考方法でアプローチしていかなければ、課題が進まない経験をする中で、置かれた立場や能力に応じて、チームや組織がうまく機能するように自己表現ができるようになったと考えられます。他方、最も“伸びなかった”能力は規律性でした(マイナス 0.2 ポイント)。これは事前評価の段階で、12 項目の中で最も高いこと(事前評価で 8.2 ポイント)に注目しておく必要があります。これは興味深いことに毎年同じ傾向が見られます。学生は、学部横断型課題解決プロジェクト(以下、横断ゼミ)を通して自己と他者の関係性を理解することで「規律性とは本来何なのか」を知るのです。つまり正しく自己評価ができるようになった結果であり、規律性は“伸びなかった”のではないと考えられます。

社会人基礎力は、12 の要素に分かれています。大きくは、前に踏み出す力、考え抜く力、そしてチームで働く力の 3 つのカテゴリーに分かれています。この 3 つのカテゴリーで見ると、考え抜く力は事前評価が低く、前に踏み出す力は上昇幅が一番大きかったという傾向が見られます。

そして、不測の事態が起こる世に生き「頑張る」ことの価値が伝わりにくい世代と言われる現代の学生が、横断ゼミの履修を通じて、社会人基礎力の向上を実感し、学部ゼミでの活動や学外での活動を充実させたものにしていくことが期待されます。



経済学部フェーズ 1 の様子(春学期)



フェーズ 1 から 1 つの教室で活動(秋学期)

表2 社会人基礎力の事前・事後自己評価【2023年度履修生】(学生による自己評価)

年度		2023年度		
カテゴリ/要素		事前評価	事後評価	差異(事後・事前)
通年⑫要素平均		6.7	7.6	0.8
1. 前に踏み出す力(通年)		6.4	7.5	1.1
①主体性	春学期	7.7	8.6	0.9
	秋学期	6.9	8.1	1.2
	通年	7.3	8.3	1.0
②働きかけ力	春学期	5.8	7.1	1.4
	秋学期	5.9	6.8	0.8
	通年	5.8	6.9	1.1
③実行力	春学期	6.1	7.7	1.6
	秋学期	6.3	7.1	0.7
	通年	6.2	7.4	1.2
2. 考え抜く力(通年)		5.9	6.9	0.9
④課題発見力	春学期	6.9	8.4	1.5
	秋学期	6.2	7.1	0.9
	通年	6.5	7.8	1.2
⑤計画力	春学期	5.3	6.6	1.3
	秋学期	6.0	5.8	-0.2
	通年	5.6	6.2	0.6
⑥想像力	春学期	5.7	7.3	1.6
	秋学期	5.5	5.9	0.4
	通年	5.6	6.6	1.0
3. チームで働く力(通年)		7.3	7.9	0.6
⑦発信力	春学期	6.4	8.1	1.8
	秋学期	6.6	8.0	1.4
	通年	6.4	8.1	1.6
⑧傾聴力	春学期	8.1	8.4	0.4
	秋学期	7.9	7.9	0.0
	通年	8.0	8.2	0.2
⑨柔軟性	春学期	7.7	7.7	0.0
	秋学期	7.5	7.9	0.4
	通年	7.6	7.8	0.2
⑩状況把握力	春学期	6.5	8.6	2.1
	秋学期	6.6	7.4	0.8
	通年	6.6	8.0	1.4
⑪規律性	春学期	8.4	8.4	0.0
	秋学期	7.9	7.4	-0.6
	通年	8.2	7.9	-0.2
⑫ストレスコントロール力	春学期	7.0	7.7	0.8
	秋学期	7.3	7.2	-0.2
	通年	7.1	7.4	0.3

\*表は10段階評価、小数点第2以下四捨五入のため差異が一致しない場合がある。

今年度(2023年度)に課題を提供いただいた協力企業は、春学期がオタフクソース株式会社、秋学期が株式会社とくし丸の2社です。2社ともに担当教員からの紹介です。学生たちは、協力企業に対して期待に応えたいという熱意のもと力を結集して取り組み、厳しくも温かい環境に恵まれた貴重な経験を積むことができました。

今年度は学長裁量経費により、履修生が2社の本社(広島と徳島県)にそれぞれ訪問させていただくことができました。少子高齢化等により「地域活性化」は、今後日本各地で真剣に取り組まなければなら

ない重要な社会課題の1つです。本学は首都圏からの入学者が多いため、地方の企業にご協力いただくことで、学生が社会課題に対して興味・関心・理解し、多様な視点を身に付けることが出来ると認識しております。

協力企業の担当者様は総じて、横断ゼミを通して本学学生を高く評価しています。毎年、歴代の協力企業(一部上場企業を含む)による採用実績が途切れないこともその成果と考えられます。授業後の、企業へのアンケート調査では、「短期間で非常にレベルの高い冊子をつくられたことに、心底感心いたしました。先生方のフォローと貴校の力の入れ方が素晴らしく、こちらも参考になりました。」「今回携わることが出来て弊社の魅力やまだまだやれることを学生さんから教わった気がしております」などの回答をいただきました。

今年度秋学期は学生からの提案の延長線上として、創業者と学生のコラボによる新たなプロジェクトが始動することになっており、若者の視点が実社会で少しでも活かされることを期待しております。

また、今年度もプロジェクト終了後の「振り返り」の授業内容を拡充して実施しました。これまでも当プロジェクトでは、「振り返り」のプロセスを重視し、キャリアコンサルタントとの面談や受講生間の相互フィードバックを実施してきました。様々な視点から、ポジティブ、ネガティブ両面を丁寧に徹底して振り返る作業は、この「振り返り」こそが成長において重要なプロセスであることを、学生たちに気づかせることを意図しています。自身の成長において他者の存在がいかに重要で貴重なものなのか、コミュニケーションの意味について認識を新たにした学生は多く、社会における企業の姿と、組織における自己の在り方を重ね合わせた、複合的な理解を促す授業であると言えます。

最終回の授業では、これまでの「振り返り」を未来にどう役立てていくのかを視野に、最後のチーム活動を行います。ゲストとして過去の受講生が登壇し、横断ゼミ終了後の学生生活や就職活動にどう役立てたのかについて話してもらうことが恒例となっています。履修学生にとって「自分の未来像」を重ねる対象である先輩たちから、横断ゼミで培った様々な力を就活や卒論に発揮できた成功経験が「自分の言葉で」語られました。

ある4年生は、「横断ゼミで人の良いところに目を向けると自分に足りないものが見えてくると強く感じた。自分と違う考えに触れることの面白さに気づき、違う年代の方や初対面の人とも積極的に話すようになった。」と伝えていましたし、また別の学生は、「受動的ではなく主体的に知る意識を大切にするようになった。履修後、学生海外研修に挑戦し、就職活動でもOB・OG訪問を積極的に行った。」と話してくれました。

「横断ゼミ」という同じ経験を共有した学生の言葉は親近感と説得力があり、社会人基礎力という指標で内省を深めた共通の経験があるため、この時間は、このプロジェクトのスピリットが学生間で継承されていく重要な機会となっています。

このように、横断ゼミで学生自身が最も成長を実感することとして、「これまでの知識を自ら積極的に深め、応用することができるようになること」が挙げられます。横断ゼミは、大学での学びと社会での実践を繋ぐ、まさに「横断」の役目を果たしています。横断ゼミを卒業した学生達が「横断ゼミを『横のつながり』だけで終わらせるのではなく、横断ゼミ卒業生達による『縦のつながり』を形成していきたい」という趣旨のもと、学生有志団体「学部横断ゼミ Alumni」は積極的に活動しているようです。横断ゼミ後に挑戦したことや就職活動についてなど様々な話ができる場を開催したり、白雉祭に出展し、課題提供企業の愛知産業㈱とキハラ㈱(ともに2022年度春学期)とのコラボ展示会や、成果物展示会などの企画を実施しました。学生たちの横断ゼミでの経験は、培った能力を柔軟に発揮できる場を学内外に積極的に求

めて、自らの力で新たな行動を起こすことに着実に繋がっています。



フェーズ2の様子（春学期）



フェーズ2の様子（秋学期）



企業訪問でインタビューする様子（秋学期）



2023年度履修生が制作した報告書

## 1-2. ゼミナール対抗研究発表大会(経済学部)

経済学部 ゼミ大会 プロデューサー 中嶋 幹・高橋 由香里

### <2023 年度「ゼミナール対抗研究発表大会」の概要>

本学のゼミナール連合会が主催する経済学部・ゼミナール対抗研究発表大会(通称「ゼミ大会」)は2004年の第1回より続いている「ゼミの武蔵」を代表するイベントの1つである。今年度のゼミ大会は2024年1月20日(土曜日)に、一般来場者の観覧を可能とする対面による方法で開催された。また、大会終了後は飲食を伴う懇親会が開催されるなど、コロナ禍以前の開催形式に戻すことができた。

ゼミ大会では、経済学部のゼミから20チームが出場し、5つのブロックに分かれて、20分間のプレゼンテーションと15分の審査員との質疑応答を通して日頃の研究成果を競い合った。また、チャレンジ枠(同窓会)によるコンテストも前年度に引き続き実施された。このブロックは、武蔵大学同窓会の提案により2017年度に創設されたものである。経済学の領域にとらわれないユニークな研究に取り組むグループや個人に対して発表機会を設けることを意図しており、他学部からの参加も期待している。今年度は、人文学部の学生を含む計5チームの報告があった。

各ブロックでは、その専門領域に応じて選出された4名の審査員が①創造性・独創性、②表現力、③着眼点、④分析力、⑤論理性の5つの観点から審査を行った。各ブロックの審査員は4名から構成されており、うち2名は実務界で活躍されている本学OB・OGが担当し、残り2名は本学経済学部の教員が担当した。厳正な審査の結果、各ブロックの優勝・準優勝チームが選ばれ、それぞれ賞状・賞金が授与された(一覧表を参照)。

ゼミ大会は、発表当日に至る準備期間においても多面的な教育的効果が見込まれる。発表テーマに関する専門的知識の習得や深化はもちろんのこと、発表の準備段階における学生間での役割分担や作業を通じて、チームワークや問題解決能力が養われる。また、実務・社会経験が豊富なOB・OGが審査員を務めるため、プレゼンテーションには実社会への応用性や、より広い対象に理解を促すための能力が要求される。また、大会終了後の懇親会における審査員との交流は、実務家の知見を得る貴重な機会となる。これらから、学生は通常の講義やゼミナール活動だけでは得られない経験・学習の機会を得ることができる。

本学のゼミ大会の特色は、大会自体を学生自身が運営をする点にある。具体的には、武蔵大学ゼミナール連合会が、武蔵大学同窓会、大学職員、経済学部教員などのサポートのもと、自ら企画運営を行っている。大会運営に関わる学生には対外機関や関係者とのコミュニケーションが求められることから、社会人として将来役立つスキルを養う過程としても機能している。

### <今後の課題>

#### (1)ゼミ大会開催日を大幅に変更することに伴う問題

来年度のゼミ大会開催日の調整が困難な状況にある。ゼミ大会は、本学教員及びOB・OGのスケジュール調整が必要なため、慣例として土曜日に開催される。今年度は、①大学入学共通テスト、②同追・再試験予定日、③全学部入試が4週にわたって予定されていたため、うち1週を開催候補日とすることができた。来年度は、①～③が3週で予定されるため候補日を設定することができない。また、前後の期間についても、12月は授業最終週及び Semester 科目試験期間と重なる一方、2月は本学の入試日程と重なるため、開催日を確保することは困難である。現状では、11月下旬または平日の開催が検討されているが、何れの場合も前例がないため、大会運営がスムーズに進まないことが予想される。従って、来年度の開催に向けて、教職員がゼミナール連合会を積極的にサポートしていく必要がある。また、旧カリ(2017カリ)時の「12月第2土曜日」のように、どこか固定できる日程を検討することが望まし

い。

#### (2) ゼミ大会出場ゼミナール数の減少

ゼミ活動における集大成のイベントであるにもかかわらず、出場ゼミ数(チャレンジ枠を除く)の減少が続いている(2023年度:20、2022年度:26、2021年度:30、2020年度:27、2019年度:31)。出場ゼミ数の減少によりゼミ大会のプレゼンスが低下し、ゼミ大会出場を目標にゼミ活動に取り組む学生のモチベーションが低下することが懸念される。

出場ゼミ数を増やすための工夫として、専門ゼミナール第1部から1ゼミ、第2部から1ゼミがそれぞれ出場することを原則とする運営ルールを改訂することが考えられる。現状では、出場ゼミの殆どが専門ゼミナール第2部である。そこで、応募数が少ない場合には、各教員が担当するゼミから合計2チームまで出場を可能とする(例えば、専門ゼミナール第1部と第2部から1ゼミずつ出場する代わりに、第2部から2チーム出場する)ような方法を検討してもよいように思われる。

#### (3) 一般来場者の増加及び学内プレゼンス向上のための施策

一般来場者の増加及び学内プレゼンスの向上を図るために、従来の SNS を通じた情報発信に加えて、今年度の新たな取り組みとして、①オープンキャンパスでのゼミナール連合会の活動を紹介したフライヤーの配布、②ゼミ大会 HP の設置(<https://seminar-conference634.studio.site/>)、③江古田駅及び新江古田駅におけるゼミ大会ポスターの掲示を行った。これらの施策が奏功した結果、延べ103名の一般来場者があった(昨年度は同9名)。一般来場者数が増えることにより、発表者による緊張感が生じ、ゼミ大会が一層チャレンジングなものになることが期待される。他方、(2),(4)で指摘するように、学内のプレゼンスは低い状況である。ゼミ大会をよりよいものにするために、今後も一般来場者の増加及び学内プレゼンス向上のための施策を講じていくことが望ましい。

#### (4) ゼミナール連合会の人員確保

ゼミ大会を運営するゼミナール連合会の体制強化が近年の課題となっている。とりわけ、今年度は1年生の所属人員が大幅に不足しており、大会運営に支障をきたす恐れがあった(2023年4月末現在、1年生の入会希望者は10人程度(昨年度は69名)であった)。現在は、3Sを通じた新入生募集のアナウンスや、教養ゼミナールを通じた入会案内の配布を追加的に行った結果、19名を確保している。ゼミナール連合会は1~2年生で構成されるため、毎年一定の人員を確保することが欠かせない。今後も、新入生を効率的に勧誘するための施策が求められる。また、人員の増減に関わらず安定的な大会運営を図るためには、運営経験を次年度に活かす工夫(業務定型化・効率化)や運営ノウハウの蓄積(引継の徹底)が必要となる。

<出場チーム、及び発表テーマ一覧表>

ブロック	ゼミ名	優勝 ◎ 準優勝 ○	テーマ名
経済 A	大野 早苗 B	◎	インバウンドと地方創生の可能性
	田中 健太 2		幸福度の要因分析－Well-being を向上させる社会・経済政策のあり方
	根元 邦朗 2	○	オリンピックと国際紛争の関係
	蓮見 亮 2		日本におけるエネルギー供給の展望
経済 B	大野 早苗 A	○	健康経営と資産運用
	小川 俊明 2		地域通貨の持つ性質とその利用について
	二階堂 有子 2	◎	都市化が大気汚染に与える影響
	広田 啓朗 2		キャッシュレス決済は GDP に影響を与えるか
経営会計 A	伊藤 誠悟 2	◎	フォロワーシップ行動と職務自律性
	森永 雄太 2		越境学習が組織に与える影響について
	山崎 秀雄 2	○	ユーモアを交えた表現が“興味”と“理解”に与える影響
	山下 奨 2		法人税法における交際費と会議費の区別の問題点
経営会計 B	海老原 崇 2	◎	外国人投資家が日本のペイアウト政策に及ぼす影響
	大平 修司 2	○	否定的情報が所属団体のブランド態度に与える影響の検討
	森永 雄太 1	○	組織スポーツの視点から今の日本企業に足りないものを学ぼう
	山下 奨 1		リース会計の貸手
金融	神楽岡 優昌 2		不動産投資信託の戦略 不動産投資戦略
	茶野 努 2	◎	なぜ結婚したいと思うのか?~その要因と男女の違い~
	徳永 俊史 2	○	東京証券取引所によるPBR1 倍割れ改善要求に対する株式市場の反応
	中嶋 幹 2		社会問題解決が株式価格に与える影響

ブロック	ゼミ名	優勝 ◎ 準優勝 ○	テーマ名
チャレン ジ枠 (同窓会)	伊藤 誠悟ゼ ミ	特別賞	ウェルビーイングを構成する5つの要素の優先順位
	H <sub>2</sub> O	○	日本におけるソーシャルビジネスの発展
	幸福度	◎	Consumption and emotions
	GHゼミナ ール		ヒーローの創造、ヒーローへの変身 ~ローカルヒーローの運営を通じた学び~
	山下 奨 3		大和銀行ニューヨーク支店事件から見る内部統制システムの 重要性

(注 1) ゼミ名に付記される 1,2,3 は専門ゼミナール第 1 部,第 2 部,第 3 部を表し、A, B は縦ゼミを表す

(注2) 経営会計 B ブロックでは、同点だった 2 チームが準優勝を受賞

(注3) 特別賞は、チャレンジ枠審査項目のうち「革新・独創」項目が高いチームを表彰するもの

### 1-3. 卒業論文報告会(人文学部)

人文学部 教授 嶋内 博愛

2023年度の人文学部卒業論文報告会は、1月29日(月)の午後に、昨年に引き続き対面で開催された。会場は、英語英米文化学科は8702教室(286人収容)、ヨーロッパ文化学科は8604教室(199人収容)、日本・東アジア文化学科は8503教室(257人収容)。今年度4期目の卒業生を輩出するGSC(英語プログラム)のCapstone Project Symposiumは、コロナ禍を経て2回目の対面開催となり、ポスターセッション(後述)も含め8号館8階の武蔵大学50周年記念ホールにて開催された。本報告書の執筆者は本年度人文学部教務委員長を務めており、また当日は各々について全体を俯瞰するような形で参加した。以下、開催までの経緯や気づき等を記す。

本年度の口頭報告者はあわせて21名(昨年は20名)で、昨年同様、例年よりやや抑えた数となった。これは対面開催の報告会の時間を長引かせない工夫だったともいえる。報告者数が抑えられた分、充実した質疑応答が繰り広げられた。

卒業していく4年次生にとって本報告会での発表は、自ら執筆した卒業論文の顕彰という意味合いがあるとともに、大学でのゼミナール活動の締めくくりともなる。報告者は、卒業論文ゼミナール及びCapstone Project Seminarの指導教授の推薦をもとに各学科・コースから選出される。推薦の基準は、提出された卒業論文の内容が学術的に優れていること、学科によっては、テーマの設定や分析の視点・方法などにとっても独創的な点がみられることが考慮される。これは、主たる聴衆である3年次生が自身の卒業論文と向き合うにあたり、柔軟な思考を獲得する一助となることを期待しての配慮でもある。

各報告者の持ち時間は限られているため、短時間でコンパクトに論文のポイントを伝えるべく、さまざまな工夫を凝らしたプレゼンテーションが行われた。報告者は、例年同様、事前にA4で3枚程度のハンドアウト(毎年度末に刊行する『卒業論文成果報告書』に収録される)を作成しているのだが、なかには、それとは別にこの日のプレゼンテーションのために準備したパワーポイントのスライドを用いる者が今年度も多数みられた。ハンドアウトが文字情報主体であるのに対し、発表用に準備されたスライドには、文字情報だけでなく写真や図表などもふんだんに用いられており、視覚効果を高めようと工夫した様子が見えられた。従来人文学部にありがちだった、文字と声为主体で視覚によるインパクトに乏しいプレゼンテーションが、コロナ禍以来、ヴィジュアルも重視するものへと変化している。学生たちにとっては、ここ数年の状況に対応していく際に否応なく迫られたものではあるものの、その結果FDの観点から見ると好ましい効果が得られた点もあるといえそうだ。

GSC(英語プログラム)のCapstone Project Symposiumのポスターセッションについて、特筆しておきたい。論文提出者全員(18名)が、事前に自身の論文についてA1サイズのパスターにまとめ、当日は10時30分の開始時間に間に合うよう、朝から会場設営やパネルへの掲示作業を行った。コロナ禍がなければ1期生からこの形式で行うはずだったものが、昨年度は3期目にして初めてリアルな会場で開催することができ、今年度が2回目となる。掲示されたポスターの内容に関心をもって足を止めた参加者に、その場で受け答えをする様子が、会場内のあちこちで見られた(ちなみに学生同士であっても質疑はほぼ英語のみで行われていた)。

口頭報告は、3学科については日本語、GSC(英語プログラム)については英語で行われた(Capstone Projectは英語による執筆)。本年度の口頭報告題目は以下の通りである。

#### 【英語英米文化学科】

- ◇ インターネット・ミームの持つ政治的な影響力 —カエルのぺぺを例に—
- ◇ 声質による音声学の再体系化 —声質の分類とその獲得を目指して—
- ◇ 『緋文字』における登場人物の宗教的意義とヘスターの役割について
- ◇ 「Choreography」について —「Choreography」文化での民族誌を含む研究—
- ◇ イギリスにおけるインド系移民の社会進出と教育の関係

#### 【ヨーロッパ文化学科】

- ◇ 歴史教科書における近現代史 —日仏そして独仏共通歴史教科書から—
- ◇ 在日クルド人から見る日本の外国人政策の問題点
- ◇ 理想的身体像にみる性差 —ドイツ青年運動における女性身体の無害化—
- ◇ パスカルにおける人間の幸福
- ◇ 『レ・ミゼラブル』における悲惨と進歩
- ◇ 『ブリキの太鼓』とカミュ文学 —物語世界における不条理哲学—

#### 【日本・東アジア文化学科】

- ◇ 『万葉集』における「あふ」の漢字表記について
- ◇ 妖怪の「親玉」—黄表紙における見越し入道—
- ◇ 林京子の『祭りの場』・『ギヤマン ビードロ』論 —原爆体験を書いた先の救い—
- ◇ 心の豊かさとは何か —竹工芸品からのメッセージを読み解く—
- ◇ 儀礼と語りから見る糸満ハーレー
- ◇ 「阿蘇品文書」相伝系譜の人脈考証
- ◇ 中世日本における刀剣生産体制の量的変遷

#### 【GSC(English)】

- ◇ The Influence of *Seventeen* Magazine on High School Student Femininity in 2014–2019: An Analysis through School Uniform Outfits
- ◇ “Cause-and-Effect”: Devaluation of the Humanities and Arts in the Neoliberal Dystopia of *Oryx and Crake*
- ◇ From Implicit to Explicit: Evolving LGBTQ+ Representations in Australian Cinema and the Challenge of Narrowed Diversity

以上

#### 1-4. シャカリキフェスティバル(社会学部卒業研究発表会)

社会学部 安藤丈将(シャカリキフェスティバル担当)

社会学部では、2009 年度から、卒業論文・卒業制作(2020 年度からは GDS コース所属学生の卒業活動も対象)の成果を発表するための場として、シャカリキフェスティバルを開催している。今年度は1月29日(月)に第15回シャカリキフェスティバルを開催した。「シャカリキ」という言葉には、「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味が込められている。また、競うというよりも、多様な成果をおたがいに披露しあう場という狙いから「フェスティバル」と名づけられている。

今年度のシャカリキフェスティバルも、オンラインで開催された。Zoom 教室を3会場設け、各教室でそれぞれ3部会ずつ計9部会が開催され、卒業論文20件、卒業制作7件、あわせて27件の学生による研究発表が行われた。発表者は工夫を凝らして Zoom の画面上に Power Point のスライドや映像等の様々な資料を共有して研究発表を行い、チャットを活用した質疑応答もなされた。質疑応答に関しては、従来の大教室で挙手するやり方よりも発言のハードルが下がり、活発になっていると思われる。

学生の研究発表は、次ページのタイトルにあるように多様だが、特筆すべきは以下の点である。

①学生の日常生活に身近な対象を選択し、それを現代社会の諸問題に繋げるというアプローチである。②方法の多様性である。専門書等の文献ベースに考察するだけでなく、量的調査、質的調査を実施して、その調査結果をもとに考察したものが多い。これらは、社会学部における初年次からの学びで重視されている点であり、4年間の教育成果を見て取ることができる。

これに加えて、3年生以下の学生にも意義深いと考えられる。3年生は、4年生の優れた発表を見ることで、卒業論文・卒業制作には何が必要なのか、どの程度の、どのような学びがあるのかを知ることができるという点で有意義である。また、自分のゼミ以外の研究発表を見ることは、学生たちの視野を広げることにもつながり、この点でも意義深かったと言える。3、4年生に比べると数が少なかったが、1、2年生の参加も見られ、今後のゼミ選択や卒論・卒制のテーマ決定にも役立っているように思われる。

このように、シャカリキフェスティバルは、学生たちが学びの成果を共有し合う場であると同時に、3年生以下の学生には残りの学生生活で自らが取り組むべき方向性を見出すための様々なヒントを得られる場であると言える。

2023 年度 第 15 回シャカリキフェスティバル〔社会学部卒業研究発表会〕

A-1 部会 司会：林雄亮	A-1	生理に対する意識差～生理用品の広告を中心に～
	A-2	若者と地元のつながり——群馬県での活動を事例に——
	A-3	地方における人口減少問題と有効的な地方創生について・茨城県取手市の事例から
A-2 部会 司会：矢田部圭介	A-4	「うた☆プリ」オタクの消費行動から見る「推し活」の多様性
	A-5	東京ディズニーリゾートで一眼レフを使う人々——Dオタの生態
	A-6	ファッションにおける好みの変化—同調行動と Instagram での情報摂取に着目して—
A-3 部会 司会：千田有紀	A-7	「女の子向け」魔法少女アニメにおけるジェンダー表象の変遷—『プリキュア』シリーズのメディア分析から—
	A-8	モッシュダイブとライブキッズ—ロック音楽のライブにおける聴衆の身体実践の文化—
	A-9	女子校教育の必要性

B-1 部会 司会：松井隆志	B-1	「あざとさ」から探るフェミニズム嫌いの正体
	B-2	同担拒否ファンのネットワーク分析
	B-3	再生したくなるサムネイル—HIKAKIN の工夫の変遷—
B-2 部会 司会：奥村信幸	B-4	首都直下地震体験ノベルゲームの制作(卒制)
	B-5	エヤイコシラム スイパー—アイヌ文化の入口(アイヌの方々について子どもたちが学ぶための教材制作)(卒制)
	B-6	音声ドラマ制作・研究—人の心を動かす作品作り—(卒制)
B-3 部会 司会：宇田川敦史	B-7	カニにさわってハゼをたべて～多摩川で学ぶ「自然」とは～(卒制)
	B-8	おじいちゃんの行方がわからなくなった(卒制)
	B-9	私のままで—幼馴染の前田—(卒制)

C-1 部会 司会：大屋幸恵	C-1	マスクが人々に与える影響
	C-2	下北沢の都市開発物語からみえてくるこれからの街づくりメソッド
	C-3	地域食堂でつながる支え合いの関係性—東京都八王子市館ヶ丘団地「たてキッチンさくら」の活動より—
C-2 部会 司会：中西祐子	C-4	孤独感の差異に関する計量社会学的研究——性差・年齢差に着目して——
	C-5	既婚者の生活時間の男女差—学歴・就業形態・ジェンダー・イデオロギーとの関連に着目して—
	C-6	目の見えない人と見える人の相互行為としてのケア—『わかりあえないまま』いっしょにいるために—
C-3 部会 司会：垂見裕子	C-7	キックボクサーの抱えるチケットトラブル—その問題化の困難について—
	C-8	プロサッカーとSNS—日本語による批判投稿に関する考察—
	C-9	日本における通信制高校の存在意義とその展望